探し出すという事は言うは易く，実行は大変困難さを伴うことなのです．

次に「気象集誌」のこともひとこと触れておきたいと思います．「気象集誌」は「天気」とちがい，外向きの学会のひとつのシンボルであり，世界の気象関係者との交流という面も持っています．最近「気象集誌」は投稿論文数も増え，1981年からは年間900頁の印刷物になりました．1970年代は投稿論文も少なく，年間600頁の線を維持するのがやっとでした．しかしここ3年間，外国の会員からの投稿がふえたこともありますが年間900頁の線を維持しています．英国の学会機関紙 Quarterly Journal of Royal Meteorological Society が年間約1,000頁である事を考えますと，印刷頁数は大体英国気象学会の機関紙と同じ位になったと思います．頁数のみで研究の質を論じる事はできませんが，今後とも是非この位の論文発表数は確保し，同時に質の向上にも努力したいと思います．

以上いろいろと決意じみた事を書きましたが，学会運営について今後とも会員の皆様の御協力を切に期待いたします．

日本気象学会および関連学会行事予定

行　事　名	開催年月日	主催団体等	場　所
月例会「長期予報・大気大循環」	昭和59年2月23日		気象庁内
日本気象学会昭和59年春季大会	昭和59年5月23日～25日	日本気象学会	気象庁
第20回理工学における同位元素研究発表会	昭和59年7月2日～4日		国立教育会館
第10回国際生気象学会議	昭和59年7月26日～30日		順天堂大学 有山記念館・医学部
Twelfth International Laser Radar Conference	1984年8月13日～17日	Int. Radiation Commission (IRC) Committee on Laser Atmospheric Sensing (CLAS)	Aix-en-Provence, France

日本気象学会誌 **気象集誌**

第II輯　第61巻　第5号　1983年10月

目　次

川平浩二：中層大気における定常惑星波の全球構造

P.S. Chu・D.N. Sikdar：1978年12月 WMONEX 期における地上気圧と地上気温の変動の特徴

岡田菊夫：都市大気中に浮遊する個々の吸湿性粒子の性質について

岡田菊夫・小林愛樹智・久芳奈遠美・岩坂泰信・武田喬男：都市大気中のエイトケン粒子の個数粒径分布について—サルフェイト粒子に注目して—

岩井邦中：板状の雪の結晶の三次元的な構造

近藤　豊・岩田　晃・高木増美：航空機観測用ケミルミネッセンス方式 NOx 測定器

要報と質疑

田中　浩：粘性をもつ中層大気中での慣性重力波及び内部重力波の運動量発散について